

(報告書)

ニューギニア高地エンガ州における喫煙慣行と社会変容に関する人類学的研究

研究助成者 深川宏樹 ((京都大学大学院人間・環境学研究科) 文化人類学)

1. 研究目的

本研究の目的は、ニューギニア高地エンガ州における喫煙慣行の持続と変化について、村落の社会関係との関連から明らかにすることである。

ニューギニア高地とは、パプアニューギニアの内陸部のうち標高 1,200 メートル以上の地域を指す。当地域の人々は、文化人類学で父系クラン（氏族）と呼ばれる親族集団のまとまりのなかで暮らす。クランは村落生活において最も基礎的な関係であり、人々の相互行為はクラン内／クラン外の区別に応じて編成される。また、ニューギニア高地の政治的な状況は、競合的な平等主義と呼ばれ、リーダーの地位は世襲制ではなく、実力主義に基づいて築かれる。こうした状況下、エンガ州において、たばこは伝統的にクラン内外の社会関係を構築し、リーダーになる男性が名声を獲得するための重要なツールのひとつとして機能してきた。

しかし、植民地統治から国家独立を経て、エンガ州の村落社会は大きく変容し、その喫煙慣行も著しい変化を被った。かつて、リーダーが自らの地位を築く主要な機会であった集団間の儀礼的贈与交換はもはや行われておらず、貨幣経済の浸透により現金や商品の価値が以前にもまして高まっている。こうしたなか、村には工場製の紙巻たばこが出まわるようになり、伝統的な葉たばこは異なる意味づけを与えられている。たばこは依然として関係構築のツールではあるが、工場製の紙巻たばこはそれ以上に都市の生活スタイルを代表する嗜好品とみなされている。

従来のニューギニア高地の研究は、上記のような、たばこの社会的役割ならびに喫煙慣行の変化に着目してこなかった。それに対して、本研究では、ニューギニア高地エンガ州ワペナマンダ地区サカ谷の事例から、村落部におけるクラン内／クラン間関係の構築と、男性による名声獲得において、たばこの消費や贈与交換が果たす役割を、植民地統治から国家独立後の社会変容との関わりから考察する。

2. 研究方法

ニューギニア高地の先行研究においては、たばこへの論及が極めて少ない。そのため、研究の方法は 2015 年 1 月に行った現地調査でのインタビューと観察を主とすることにした。本研究の調査対象地域はニューギニア高地エンガ州ワペナマンダ地区に位置するサカ統計地域の M 村である。なお、今回の調査でインタビューにより収集した

語りには、現在の喫煙慣行だけでなく、過去の喫煙慣行についての語りも含まれる。また、筆者は 2007 年 3 月から 2009 年 2 月にかけて計 24 ヶ月間にわたる、同地域を対象とした長期調査を行っており、本研究の基盤となる社会構造やリーダーシップについての資料を収集していた。

文献資料に関しては、過去の喫煙慣行を理解するための背景となる、植民地期のエンガ州村落部の社会構造とリーダーシップに関する情報を参照した。

3. 研究計画と実施状況

当初の研究計画としては、2014 年 8 月にパプアニューギニアでの現地調査を実施する予定であった。しかし、助成研究を開始してから、パプアニューギニアの村落部では、都市居住者が村落部に帰省するクリスマス時期に、工場製の紙巻たばこの消費が顕著となることを知ったことから、現地調査の実施時期を 2015 年 1 月に変更した。その結果、村落在住者のみならず、都市居住者まで含めて、たばこの意味づけおよび社会的役割を広く明らかにすることができた。

4. 研究成果

4-1. エンガ州村落における伝統的な喫煙慣行

パプアニューギニアは、オーストラリアの北に浮かぶ世界第二位の大きさを誇る、ニューギニア島の東側半分と、その周りに浮かぶ 600 近くの島々からなる国である。パプアニューギニアの国土面積は 460,000km²（日本の総面積の約 1.25 倍）であり、総人口は 5,171,543 人である [Papua New Guinea National Statistical Office 2000a]。国全体は行政上 22 の州から成り、一般的にはおおきく 4 つの地方、すなわちパプア地方（ニューギニア島南岸）、モマセ地方（ニューギニア島北岸）、高地地方（ニューギニア島内陸部のうち海拔 1,200m 以上）、島嶼地方に区分される [熊谷 2010: 252-253]。また、パプアニューギニアの特徴として、言語数が非常に多く、その数は 700 以上にのぼるといわれる。くわえて、共通語としてピジン英語がある。

かつてパプアニューギニアはオーストラリアの植民地であったが、1975 年に独立を果たした。しかし、現在に至っても、村落社会には植民地統治の影響が色濃く残っており、本研究で取り扱うニューギニア高地の喫煙慣行も、長期にわたる社会変容のプロセスに位置づけて理解する必要がある。

本研究の対象となるニューギニア高地エンガ州の面積は、12,800 k m²であり、人口は 295,031 人である [Papua New Guinea National Statistical Office 2000a]。ワペナマンダ地方の人口は 53,547 人、サカ統計地域は 15,604 人、M 村は 1,303 人である [Papua New Guinea National Statistical Office 2000b]。エンガ州のサカ統計地域は、現地ではサカ谷と呼ばれる。本研究でもそれにならい、サカ谷と表記する。調査

地の言語は、エンガ語である。主食はサツマイモであり、生業は焼畑農耕と豚の飼養を主とし、副次的に狩猟採集や漁猟を行う。換金作物としては、コーヒーがある。

ここではまず、村落社会の基礎的な社会関係であるクラン内／クラン間の関係について記述する。そのうえで、植民地期初期の村落社会における葉たばこの社会的な役割と、喫煙慣行の変化について論じる。

4-1-1. クラン内／クラン間関係の概要

本研究のいうクランとは、対象地域のエンガ州サカ谷で人々を区分する最大範疇である「アガリ・タタ・メンダイ (*agali tata mendai*)」を指す。アガリとは一般的に「男性」を意味する語であり、タタの語は単独では用いられないが、「タタ・タタ (*tata tata*)」と組み合わせることで「色々」「様々な種類」という意味になる。また、「メンダイ (*mendai*)」は「ひとつ」「同じ」の意である。「アガリ・タタ・メンダイ」を直訳すれば、「一種類の男性」「同じ種類の男性」と訳することができる。

ここでなにか「ひとつ」で「同じ」かと言え、それはクランの始祖であり、血である。クランの成員は「ひとつの血 (*taeyoko mendai*)」を共有するとされている。「ひとつの血」は、クランの始祖である 1 人の男性祖先に由来する。サカ谷には 18 のクランがあり、各クランは、それぞれ特定の始祖をもち、この始祖の名がクランの個別名称となっている。

クランは父系出自に沿って 2 段階にわたり分節化する。クランの各分節には個別の男性祖先がおり、その祖先の名が個々の分節の名称となる。概して、上位分節には「ひとつの男性小屋」を意味する「アガリ・アンダ・メンダイ (*agali anda mendai*)」の語があてられ、下位分節には「1 人の祖先」を意味する「ユンバンゲ・メンダイ (*yunbange mendai*)」の語があてられる。本研究では便宜的に、アガリ・アンダ・メンダイをサブクラン、ユンバンゲ・メンダイをリネージと訳す。

クランは外婚の単位であり、土地所有ならびに政治的文脈や儀礼的文脈における集団行動の最大単位である。サカ谷はいくつかの区画に分割されており、その中の 1 区画を各クランが所有している。クランの男性成員は集住し、村落を形成する。過去には土地争いを原因として異なるクランに属する人々の間で戦争が起こっていた。少なくとも 2000 年以降、サカ谷では戦争はないが、現在でも小規模な土地争いは局所的に継続している。くわえて、大量の豚を与え合う儀礼的贈与交換テー (*tee*) も、異なるクランに属する人々の間で行われていた。

居住様式は、基本的に夫方・父方居住であり、多くの場合、土地は父系に沿って相続される。しばしば、人は皆、父のクランに属すると言われる。事実、成員権の継承においても父系の傾向が強い。しかし、妻方・母方居住、そして母親の兄弟から姉妹の息子への土地相続も珍しくなく、クランには母親とのつながりによって組み込まれた

非男系成員が含まれる¹。非男系成員はクランの土地に居住し、他の成員と日常的に贈与交換や共食を行う。また婚資や補償の支払いのために、財を供出するなどの義務を果たす。それらの行為によって、彼らは男系成員と同様の扱いを受けるようになる〔深川 2011〕。

後に述べる植民地期から独立後の社会変容のなかでも、クラン内／クラン間の関係は一定程度、その形式を保っている。クランは、父系原理を基礎としながら、非男系成員を組み込む柔軟性をもつ。また、クランは外婚や土地所有、集団レベルの政治的活動の最大単位であり、婚姻や交換を通して他のクランと関係をもつ。

しかしながら、以下に論じるように、クラン内外の相互行為の内実と、そこで扱われるモノの価値は常に変化しており、たばこと喫煙慣行も、その社会的な役割を大きく変えていった。

4-1-2. 過去のクラン内／クラン間関係における葉たばこの社会的役割

パプアニューギニアの植民地統治の歴史は 19 世紀後半にまで遡るが、ニューギニア高地は、西洋との接触が最も遅い地域として知られている。オーストラリア植民地政府が、ニューギニア高地で統治を開始したのは 1940 年代半ばであり、エンガ州にあっては 1950 年代初頭とさらに遅い。植民地政府は、エンガ州の各地で頻発していたクラン間の戦争を平定し、それによってキリスト教の宣教活動や、研究者による学術調査が可能となった。そうしたなか、最も早く調査に着手した人類学者が、メギットであった。彼の主な調査期間は、1955 年から 1957 年である〔Meggitt 1956, 1965〕。彼の収集したデータは、未だ植民地統治の影響が深く浸透していない、過去のエンガ社会を知るための数少ない記録として貴重である。

しかしながら、残念なことに、メギットの記述には本研究の主題である、たばこへの言及が極めて少ない。エンガ社会の諸側面を体系的に記述した民族誌では、対象地域の財についてはほぼ網羅的な記述が見られるが、消費財の項目にたばこは含まれていない〔Meggitt 1965: 219〕。彼の記述のなかで唯一、たばこが登場する箇所では、エンガ社会における様々な交換財（交換可能なモノ）の価値づけが、5 段階に分けられている。たばこは、下から 2 番目に位置づけられており、価値の低い財として分類されている²〔Meggitt 1974: 170〕。メギットの研究では、たばこに関してそれ以外の記述

¹ 私が調査したサブクランは人口 494 人（男性 241 人、女性 253 人）、113 世帯であった。そのうち、妻方あるいは母方居住の者は 74 人（男性 40 人、女性 34 人）、19 世帯であった。

² メギットによれば、エンガにおいて最も価値の高い交換財は、①豚とヒクイドリであり、その次に価値の高い財は、②真珠貝のペンダント、調理済みの豚肉、石斧、ヒクイドリの羽の頭飾り、子安貝の腕輪であった。そして、順次、③子安貝の首飾り、油を入れる瓢箪、塩、編み袋と前掛け、ゴクラクチョウの羽、矢、槍、太鼓、鶏、オポ

が見当らない。たばこは取るに足らないものとして、彼の関心を惹かなかったようである。

だが、筆者がインタビューで過去の喫煙慣行について尋ねてみると、実際には「価値の低いたばこ」とは異なる像が見えてきた。M 村の 50 代から 70 代男性によれば、1950 年代に植民地統治が始まる以前、すなわち「白人が来る前」から、彼らの父親や祖父世代の人々はたばこを栽培し、喫煙していたという。当時は 2 つの種類のパイプを使って、たばこを吸っていた。ひとつは、特定の植物の葉を天日干しにして、その葉でたばこを包んで、細い竹の先端に差し込み、喫煙するものであった(写真 1 の上)。たばこは、囲炉裏の煙で燻して乾燥させ、手で砕いたものを使った。もうひとつのパイプは、細い竹の側面に穴を開けて、そこに特定の植物の葉で包んだたばこを差し込み、吸うタイプのものであった(写真 1 の下)。後者のパイプは、西洋式のパイプの形を模倣したものにも見えるが、70 代男性によれば植民地統治以前から使用されていたという。



写真 1 2 種類の伝統的なパイプ

エンガ語で、たばこは「キネ (*kine*)」と言う。2 種類のパイプはともに「キネ・ペンケ (*kine penke*)」と呼ばれていた。たばこを包むのには、5 種類の植物の葉のいずれかが用いられた。それぞれエンガ語で「ガナレ (*ganale*)」、「マンディ (*mandi*)」、

ツサム、④イモ貝の円盤、織った腕輪とベルト、水を入れる瓢箪、籐、木の皮の繊維、たばこ、⑤パンダナスの実、タロイモ、ヤムイモ、ショウガ、サトウキビ、サツマイモ、豆となるにつれ、価値が低くなってゆく [下線・引用者、Meggitt 1974: 170]。

「イキキ (*ikiki*)」、「アンギランプ (*angilamp*)」、「エリヨコ (*elyoko*)」と呼ばれる植物である。たとえば、村落にはガナレとマンディが多く生えているため、村にいるときにはそれらの葉でたばこを吸った。しかし、狩猟などのために山を登り森の奥深くに進むと、植生が変わりガナレやマンディが生えていないため、標高の高い場所に生えるアンギランプやエリヨコの葉でたばこを包んで吸ったという。こうした喫煙方法は、パプアニューギニア独立後の 1970 年代後半にも一般的であり、80 年代後半になっても少数の者がパイプを使用していたという。

1940 年代～1970 年代（推定）の喫煙慣行に関する、人々の語りにおいて興味深いのは、当時、たばこが比較的価値の高い交換財であった点である。これは、先述のメギットの記述とは対照的である。たばこは交易により入手されるわけではなく、人々自身が栽培して得ていたのであり、一見すると、この主張は奇妙に映る。しかし、彼らの語りによく耳を傾けてみると、エンガ独自の観念を差し挟みながら、当時のたばこの社会的な価値が徐々に理解される。

まず、たばこは、それぞれ味が異なり、吸ったときに「強く重い (*kii*)」ものが好まれ、弱く軽いたばこは吸うに値しないとされた。適度な味というものはなく、ともかく強ければ強いほど良い。たばこの強さは植える場所に左右され、家屋の脇が植栽に最適とされた（写真 2）。なぜなら、人々は家屋内部で薪木を燃やし、食物を調理し暖をとるが、その煙が家屋の脇に植えられたたばこに当たることによって、たばこの味



写真 2 家屋脇に植えられたたばこ
(現在でも、わずかながら家屋の脇に植えられている)

が強く重くなると考えられていたからである。くわえて、炉の灰や、サトウキビの皮やかすが風化したものを、たばこの肥料として与えていたという。

当時、たばこは強く重いものを求めて家屋脇にしか栽培されなかったため、大量には収穫できず、稀少であったと言われる。また、植民地期を通して、エンガ州にはたばこ以外の嗜好品が無く、刺激の強い食物や香辛料も生姜を除いて存在しなかった。それゆえ、たばこは人々にとって唯一の嗜好品であり、村落の単調な食生活に豊かな刺激をもたらす貴重な品であったことが推察される。調査当時、50代から70代の男性らは、自らの父親や祖父が、たばこの葉を丁寧に一枚ずつ並べ重ね、それをパンダヌスの木の葉で包んで、大切に持ち運ぶ姿を記憶している。

過去の喫煙慣行を理解するためには、ここで当時の生活様式について説明を多少加えねばならない。エンガ州では1960年代から70年代まで、男性と女性は、それぞれ別々の家屋に居住していた。男性たちは、概してサブ克蘭からリニージの範囲で、ひとつの大きな男性小屋に集まって寝食をともにした。それに対して、夫婦は世帯ごとに個別の女性小屋をもち、妻や娘が各世帯の女性小屋に居住していた。日中の畑仕事や豚の飼育は夫婦の協働で行なわれるが、夫と息子は必要に応じて女性小屋を訪れるのみで、基本的には、夕方に男性小屋に帰るという生活形式であった³ [Meggitt 1965: 16-24]。ただし、男性小屋は、男性たちによって共同所有される、いわば「公の施設」であったため、各男性が個人的に所有する財、なかでも価値の高い豚や貝貨は、世帯ごとの女性小屋に保管されていた。そして、たばこを植えるのも、たばこの葉を乾燥させて保管するのも、女性小屋だったという。

現在50代後半から70代男性は、今でも過去の男性小屋での暮らしを嬉々として語る。毎日夕方になると、男性らはサツマイモやタロイモ、豆、サトウキビなどの食物を持ち寄り、それを皆で調理して共食し、冗談の上手い老年男性の話に笑いが絶えなかったという。しかし一方で、それらの食物が、サブ克蘭やリニージの男性らのあいだで共食されたのに対して、たばこの共有や贈与交換に関しては、そうはいかなかったとされる。先述したように、当時、たばこは多量には得られず、比較的価値が高かった。それゆえ、単一の男性小屋で共住する者たちのあいだでも、頻繁にたばこを与えあったり、一緒に吸ったりする相手は限られていた。たばこの共有や贈与交換の頻度がとくに密な男性同士は「心を置き合う (*mona setenge*)」関係にあると言われ、その結束は固かった。

このようにたばこの共有や贈与交換は、男性小屋に共住するサブ克蘭やリニージの男性らの凝集性をさらに強固にする行為であった。しかし一方で、現在、男性らが口を揃えて語るのは、当時、たばこをめぐるトラブルも多かったことだ。男性らは自

³ 男女の居住が分離される背景には、女性の身体がもつ穢れが、男性の身体に悪影響を及ぼすという観念があった [Meggitt 1965: 23]。

分の手持ちのたばこが無いときに、他の男性に懇請することがあったが、それを拒絶されたときの怒りは甚大であったと言う。この点について度々、言及されるのは、たばこの懇請を断られたときの恨みは恐く、他クランとの戦争で、自分にたばこを与えなかった男性が矢で負傷した際には「お前のたばこに矢を抜いてもらえ」と言い放ち、見捨てることすらあったとされる。

また、たばこが稀少だったため、その窃盗も少なくなかった。男性小屋の炉の隅に置いた吸いかけのたばこが知らぬ間に持ち去られることや、女性小屋の脇に植えた収穫前のたばこの葉が摘み取られてしまうことなど、珍しくなかったという。ただし、サブクランやリニージの男性らは、互いの性格や習慣、行動範囲等を知り尽くしているため、窃盗の瞬間を押さえたり、犯人のあたりをつけて糾弾するなどして対処していた。しかしながら、実の父親と息子のたばこを原因とした喧嘩なども含め、ともかく「昔は葉たばこをめぐるトラブルが多かった」というのが、現在の人々の共通認識となっている。

以上のように、たばこはクラン、なかでも男性小屋で共住するサブクランやリニージの男性らの凝集性を高めると同時に、そこに亀裂をもたらす潜在性をもつモノであった。一方、クラン内部のみならず、クラン外部の関係においても、たばこは重要な社会的意義を有していたという。

クランは外婚の単位であり、配偶者は異なるクランに属する者から選ばれる。クランの成員は他のクランから女性を得て、その返礼として婚資を与える。その後、姻族は、相手が婚資や補償を支払う時に、豚などの財を援助したり、互いの家を訪問し共食するなどして友好関係を維持する。この友好関係は、夫婦に子どもが生まれ、その子どもが成長して死ぬまで続き、子どもと母方クランの成員（母方親族）とのあいだには親密な関係が築かれてゆく。

とくに男性は、姻族や母方親族と、(1) 家屋の訪問と共食、(2) 共同労働などの相互扶助、(3) 婚資や補償の支払い時における財の供出などを通して密な関係を築く [Feil 1984]。本研究との関連で重要なのは、(1) 姻族や母方親族が自らの土地を訪問した際に、男性はゲストを迎える作法として、たばこを与えていたという点である。基本的に、姻族や母方親族が訪れたときには、普段は食さないような特別な食べ物（バナナ、鶏肉、豚肉など）を供するべきだとされる。その際に、料理を出すまでの間、来客がすぐに口にできるサトウキビやたばこを差し出すのが礼儀だとされた。

とくに親しい姻族や母方親族に対しては、多量のたばこの葉を束ねて贈与することがあったという。そうしたたばこの贈与は、エンガで極めて価値の高い財である豚肉によって返礼されることがあった。多くの場合、その返礼の機会は、クラン間の儀礼的贈与交換テーであった。

テーとは、クランの男性たちが他クランの男性たちと、村落の広場で豚や貝貨など

の財を交替で贈り合う競覇的な儀礼的贈与交換である。男性たちは、贈与する豚の頭数を競い、名声を獲得してきた。これはクランのリーダーが自らの地位を築く主要な機会でもあった [Feil 1984; Meggitt 1974]。かつて、クランのリーダーとなる男性はエンガ語で「カモンゴ (*kamomgo*)」と呼ばれていた。カモンゴは世襲の役職ではなく、クラン間で贈与する豚の頭数を競い合うテーにおける財の操作能力と、公の場での弁舌能力に基づいて獲得される地位だとされていた [Feil 1984: 148-152, 195-203; Meggitt 1967]。リーダーになるためには、姻族や母方親族などと数多の交換パートナー関係を築き、自身のクランの贈与交換を主導して成功させねばならなかったのである。

本研究の調査で明らかとなったのは、姻族や母方親族とテーにおける交換パートナー関係を築くひとつの手段が、たばこの葉の束の贈与であった点である。さらに、人々によれば姻族や母方親族でなくとも、何らかのきっかけでゲストとして自らの土地を訪れた男性に、多量のたばこを贈与することで「心を置き合う」関係となり、テーでの交換パートナーになれたという。それゆえ、70代男性によれば、夜な夜な男性小屋で祖父や父親から、自分たちの慣習について教育される際、「豚を育て、たばこを植える。そうすればリーダーになれる」と教わったという。たばこは、先行研究で指摘されたような、価値の低い、取るに足りない財どころか、男性がクラン内の成員たちと濃密な関係を築き、さらには集団間の儀礼的贈与交換で名声を得てリーダーになるための重要な財であったのである。

4-2. 植民地統治から独立にかけての喫煙慣行の変化

過去のエンガ州の村落生活における葉たばこの価値の高さに比して、現在、伝統的な葉たばこよりも、工場製の紙巻たばこに高い価値が置かれている。2種類のたばこは、村の人々によって「伝統／近代」の二分法で振り分けられ、文化的な価値において序列を付けられているのである。具体的には、伝統的な葉たばこは「我々の慣習 (伝統)」とされ、「白人の慣習 (近代)」である工場製の紙巻たばこよりも価値づけが低い。この二分法に基づく序列化の論理は、パプアニューギニアの人々が経験した植民地統治から独立の歴史と密接に結びついている。

先述したように、オーストラリア植民地政府が、ニューギニア高地で本格的に統治の基盤を整えたのは1940年代半ばからであった。植民地政府の第一の目標は、クラン間の戦争を鎮圧することにあつた [Gordon and Meggitt, 1985: 44, 162-163; 畑中 1975: 24-25]。その先発隊となったのは、パトロール・オフィサーと呼ばれる植民地行政官である⁴。彼らは銃を携えて各地をまわり、瞬く間に戦争を平定し、統治の礎を

⁴ ピジン英語で通称キアアップ (*kiap*) と呼ばれるパトロール・オフィサーは、行政と

築いていった。それまで鉄器すら目にしたことがなかった高地の人々は、銃という未知の力をもつパトロール・オフィサーを畏怖したという。遅くとも 1950 年代後半には、多くの地域でクラン間の戦争が見られなくなった。

一旦、戦争が平定されると、高地は急速に発展し、変化することとなる [Meggitt 1971: 200-207]。まず、パトロール・オフィサーは各地を巡察しながら人口調査を行い、人々を労働力として動員し、大小の道路を建設し始めた。これと並行して、政府とキリスト教宣教師は学校や病院、教会、農業センター、商店などを巡察の拠点に建てた。さらに 1960 年代後半には、換金作物であるコーヒーの栽培が成功を収め、人々が商品や現金を得る機会が増えた。短期間のうちに高地は発展を遂げたのである。

しかし、1960 年代半ばになると、早くも転換期が訪れる。オーストラリアがパプアニューギニアの独立を見据えて、植民地政府の再編を開始したのである [Gordon and Meggitt 1985: 39-69; Meggitt 1977: 156-181]。だが、その試みは成功したとはいえなかった。組織内部のヒエラルキーは不明確で部署間の連携が成り立たず、職員の質も低下した。それだけでなく、政府の秩序維持能力が弱体化し、ニューギニア高地では 1960 年代後半に、それまで抑えられていたクラン間の戦争が復活した。70 年代に入ると、クラン間の戦争はさらに増加してゆく。1975 年に独立したパプアニューギニアは、都市の治安が悪化するなど、法と秩序の問題を抱えた「脆弱国家」というレッテルを貼られるに至っている [Dinnen 2001]。

こうした過程を、エンガ州サカ谷の人々は、オーストラリア人が「強い法 (*lo keto*)」を敷き、パプアニューギニア人がその「法」を崩壊させる歴史と捉えている [深川 2012a]。彼らは植民地統治を抑圧的なものとはみなさず、むしろ「白人が我々の面倒を見ていた」と肯定的に語る。植民地期は、「強い法」によりクラン間の戦争が抑止され、悪い行いがなくモラルの面で優れた時代であったと記憶されているのである。さらに植民地期の肯定的な評価は、新たな富の流入とも無関係ではない。たとえば、「白人」がもたらした鉄製の斧、ショベル、大鉋 (ブッシュナイフ) などに代表される外来品は、非常に頑丈で良質だったことから、「我々」の作りだした物よりも優れていると褒め称えられている。

独立後に荒廃した社会状況を受けて、村人は植民地期以前から続いている自分たちの伝統を「古い慣習 (*mana wanbatae*)」とし、植民地期以降にオーストラリア人がもたらした「新しい慣習 (*mana enenge*)」あるいは「白人の慣習 (*koneya mana*)」よりも、ある種劣ったものと捉えている。それだけでなく、「新しい慣習」を自ら実践することで、「白人のようになる (*nai injingi*)」ことが、達成すべき目標として掲げられる。

司法の権限をもち、警察権も行使できる万能型の役職であった [畑中 1975: 24-25]。

現在のサカ谷で流通する紙巻たばこも、単なる商品ではなく、人々の歴史認識と分かち難く結びついている。伝統的な葉たばこは「古い慣習」とされるのに対して、工場製の紙巻たばこは「白人の慣習」である「新しい慣習」に分類される。彼らが初めて紙巻たばこを目にしたのは、植民地期に村落を巡回していたオーストラリア人のパトロール・オフィサーを介してであった。パトロール・オフィサーは村人に紙巻たばこを与えなかったが、ピジン英語をエンガ語に翻訳する通訳者だけには、仕事の報酬として現金の代わりに鉄斧や米、缶詰にくわえて、紙巻たばこを与えていたとされる。

M村に居住するYクランの人々のなかでは、3人の男性が通訳者であり、彼らだけが紙巻たばこを吸って、いわば「白人」のように振る舞っていたと語り継がれている。彼らはパトロール・オフィサーと村人の媒介者となり、衆目の前で「白人」の紙巻たばこを吸ってみせることで「大きな名を得た (*kenke andaki nyii*)」、すなわちクラン内外の大勢の人々にその名を轟かせ、名声を得たと言われる。

その後、キリスト教の宣教師ら（カトリックとルター派）がサカ谷に商店を開き、鍋やショベル、洋服、米や魚の缶詰などの商品にくわえて、工場製の紙巻たばこを販売するようになった。宣教師らは、教会や家屋の建築時に必要な木材や労働力の対価として現金を支払ったため、そのとき初めて村人が紙巻たばこを自ら購入し、喫煙する機会が生まれた。だが、彼らには定期的な現金収入が無く、紙巻たばこを吸う男性は極めて少なかったとされる。

1960年代後半から1970年代初頭になると、高地労働計画(Highlands Labor Scheme)の制度を利用して、ニューギニア高地から沿岸部のプランテーションに出稼ぎに行くことが可能となった [West 2012: 80, 109]。サカ谷の男性らも出稼ぎに行き、様々な商品とともに紙巻たばこを手に入れて村に持ち帰ったという。

しかしながら、調査時点で50代から60代の男性らによれば、当時は紙巻たばこを吸っても「木の葉の味」しかせず、とくに彼らの父親世代の男性たちの大半は、強く重い伝統的な葉たばこを好んだという。それでもわざわざ紙巻たばこを購入するのは、皆にとって新奇な工場製たばこを吸うことで、自らが「白人の慣習」を実践する姿を誇示し、名声を得ようとする男性に限られた。彼らの多くは、1960年代後半から独立前後に整備された地方行政制度と司法制度のなかで、地方評議員(councillor)や村落裁判判事(village court magistrate)に選出され、定収入のある者であった。彼らは伝統的な儀礼的贈与交換テーとは別の回路で、名声を獲得してリーダーとなったのである [深川 2012b]。

それに対して、その他の男性たちは、村落の広場や市場といった公の場で紙巻たばこを口にくわえる男性を目にしては、「あいつは『白人』だ。現金をたくさん持っているから紙巻たばこを吸っているぞ」と噂し、その者の地位の高さを判別していた。それが自らのクランの男性であれば、誇らしく感じたと言われる。

男性とは対照的に、女性はそもそもクランのリーダーになることができず、名声にも関心がない。そのため、葉たばこを吸う女性はいても、紙巻たばこを吸う女性は皆無であったとされる。工場製の紙巻たばこは何よりも、リーダーを志向する男性が名声を獲得する手段のひとつであったのである。

以上のように、エンガ州サカ谷における喫煙慣行の変化は、植民地統治から独立前後にかけての社会変容と切り離して理解することができない。社会的な名声に関していえば、クラン間の儀礼的贈与交換テーは、1980年代までは行われていたが[紙村 1993]、1990年代半ばになるとエンガ州の多くの地域では放棄され、クランのリーダーとしての地位を確立するのに、もはや儀礼的贈与交換テーにおける成功は重要ではなくなっていく。

一方で、エンガ州に限らず、他のニューギニア高地諸地域では、クラン間で全く新しい種類の競合が行われるようになった。たとえば、クランは他クランとビジネスの成功を競うようになった。「ビジネス・リーダー」はクランの男性たちをうまく動員しながらビジネスを大規模化させ、男性たちはそれをクランの名誉として称えた[紙村 1988; Finny 1973]。他にも、国会議員選挙やキリスト教の宗派間対立、クランから輩出された定職者や企業家の力を借りた村落の開発事業などをめぐって、クラン間の競合は独立後から現在まで、多様な領域で展開している。そこでは、クラン間の競合は、いわゆる伝統的な活動から、植民地期以降に外部よりもたらされた「白人」の「新しい慣習」へと移行し、その様相を大きく変えていったのである。

ただし、依然、クランのリーダーの地位が、世襲制ではなく、実力に応じて獲得される点には変わりがない。名声を得るためには、地方評議員や村落裁判判事といった行政・司法制度に則った役職に就くことが重視され、くわえて貨幣経済の浸透によって現金や商品の価値も高まった。その過程で、工場製の紙巻たばこは、リーダーとなる男性が新たな社会状況のなかで自らの力を顕示し、名声を獲得する文脈に組み込まれ、一種の威信財とみなされるようになったのである。

4-3. 現在の喫煙慣行

現在、エンガ州サカ谷の村落には、おおきく 2 種類のたばこが流通している。前述の伝統的な葉たばこと、工場で大量生産された紙巻たばこである。前者の葉たばこは、エンガ語で「キネ (*kine*)」、ピジン英語で「ブルース (*blus*)」と言い、それらを組み合わせて「キネ・ブルース (*kine blus*)」と呼ばれることもある。葉たばこは村人が自ら栽培するか、都市や村落の商店、市場などで購入する。現在、葉たばこを吸うのに伝統的なパイプは使用されておらず、代わりに、新聞紙でたばこの葉を巻くのが一般的である (写真 3)。



写真 3 新聞紙で巻く葉たばこ

工場製の紙巻たばこは、葉たばこと同様に、エンガ語で「キネ」と言い、ピジン英語では「シガレット (*sigaret*)」「ケンブリッジ (*kenbligi*)」と呼ばれる。紙巻たばこは、都市だけでなく、サカ谷の商店や市場でも販売されている。サカ谷の商店で売られる紙巻たばこの大半は、ブリティッシュ・アメリカン・タバコ社のケンブリッジとポールモールという 2 種類の銘柄である。前者のケンブリッジのほうが人気が高い。なお、工場製の紙巻たばこは都市でも村でも、1 本ずつのバラ売りが一般的である。

先述したように、たばこの味は、強く重いほど好まれる。紙巻たばこは、フィルターが付いていることもあり、伝統的な葉たばこに比べて軽く弱すぎるとされ、現在も、味においては葉たばこに劣ると言われる。また村落では、葉たばこは 1 本当たり 10 トエア (4 円) と安値であるのに対して、紙巻たばこのケンブリッジは 1 本当たり 1 キナ (44 円) と、葉たばこの約 10 倍の高値である⁵。それゆえ、工場製の紙巻たばこを吸う者は少なく、依然として葉たばこを口にする人のほうが多い。

筆者がインタビューした M 村の Y クランの P サブクランに属する 30 代から 60 代の男性 35 人中、①日常的に葉たばこを吸い、紙巻たばこをほぼ吸わない男性は 29 人であった。逆に、②日常的に紙巻たばこを好んで吸い、現金が無くなったときのみ葉たばこを吸うという男性は 6 人であった。それら 6 人の男性のうち 2 人は都市で賃金労働に従事し、クリスマス休暇として 12 月～1 月に帰村した者であった。後の 4 人は

⁵ パプアニューギニアでは、独自の通貨としてキナ (*kina*) とトエア (*toea*) が使用されている。1 キナは、100 トエアである。調査期間中 (2015 年 1 月) においては、1 キナが 44~45 円程度の為替レートで取引されていた。

皆、定期的な現金収入がないが、彼らの実の兄弟が、首都で会計事務所を経営するなど、経済的な成功を収めており、ときおり親族からの送金が見込まれる者たちであった。以下では、現在の村落生活において、伝統的な葉たばこと、工場製の紙巻たばこがもつ社会的意義について論じる。

4-3-1. 葉たばこの共有による社会関係の構築

現在、村落で栽培されるたばこは、以前ほど高い価値をもっていない。その理由としてまず、1990年代初頭に、エンガ州に隣接する西部高地州で、葉たばこの生産量が増加し、同州の州都ハーゲンの市場に、大量の葉たばこが出まわるようになった。その傾向は2000年以降、一層顕著になり、サカ谷でもハーゲンで買い付けた葉たばこが販売されるようになった。さらに、サカ谷の2つのクランに属す男性らが、西部高地州に居住する姻族や母方親族からたばこの栽培方法を学び、家屋脇に細々と植えるのではなく、比較的大きな畑を作るようになった。もはや、葉たばこは以前のような稀少財ではなく、村に溢れかえるものとなったのである。過去にはその稀少価値ゆえに「葉たばこをめぐるトラブルが多かった」と言われるが、筆者の調べた限り、葉たばこの窃盗や、たばこをめぐるトラブルの事例は、2000年以降、皆無であった。

しかし、だからといって葉たばこが担う社会的な役割が失われたわけではない。むしろ、葉たばこが稀少でなくなった現在、過去と比べて、日常的に葉たばこの回しのみや贈与は一般的になったと捉えられている。男性たちは道端に、5~6人ほど集まり、車座になって少額の現金を賭けたカード・ゲームにふけり、葉たばこの回しのみをする。1人の男性が10トエア（4円）で葉たばこを買い、それを5~6人で回して吸う。そのたばこがなくなると、別の男性が葉たばこを買いに行き、再び皆で喫煙する。これを繰り返し、全員がたばこを買うまで、カード・ゲームは続いてゆく。皆でたばこを買い、皆で吸うという、葉たばこの共有パターンが観察された。

こうした回しのみは、新聞紙で巻いた葉たばこの長さが15~20cm程度と長く、かつその強く重い味のために数回吸引するだけで満足できるという、葉たばこの物質的特性によって可能となっている。工場製の紙巻たばこでも同様に、1人の男性が喫煙し、最後まで吸い切らずに、吸いかけを他の男性に与える行為は一般的である。しかし、紙巻たばこの場合、1本の長さが短いため、多くともせいぜい2~3人で共有するのが限度である。また、紙巻たばこの場合、1本当たりの値段が高いため、誰に与え、誰にもらったかを「負債 (*yanu*)」としてカウントするのに対して、葉たばこは安く、かつ共有が当然視されていることもあり、「負債」にカウントされることなく、気軽に回しのみされている。

現在、村落の男性が、自分たちの関係について語る際、最も頻繁に言及するのは「男性小屋の喪失」である。実際には、過去の男性小屋と同じ形態の家屋が残っており、

その家屋は今も男性小屋と呼ばれているが、過去のようにサブクランの男性らが集まって寝食をともにすることはない。むしろ、過去の女性小屋のように、世帯単位で男性小屋が所有され、そこには夫婦とその子どもが居住している。そのため、毎晩、男性らがひとつの家屋に集まり、持ち寄った食物を共食することはなくなった。その結果、サブクランの男性間の連帯意識が相対的に薄れ、軋轢が多くなったと語られる。もちろん、現在でも男性が他の世帯の家屋を訪問し、共食する機会がないわけではないが、植民地期やそれ以前に比べれば、その頻度は極端に減少していることは確かであろう。

かつての男性小屋を中心とした慣習が喪失したなか、葉たばこの日常的な共有や贈与は、サブクランの男性たちの関係を維持する、重要な機能を果たしている。村落生活で、葉たばこのみがそうした機能を担っているわけではないとしても、葉たばこが、植民地期やそれ以前のように名声獲得の手段としてではなく、むしろクラン内部の日常的な関係構築へとその社会的役割のウェイトをシフトさせているといえる。

さらに、現在の葉たばこの社会的役割を顕著に表すのが、次の事例である。2015年1月時点でM村に居住するYクランのPサブクランの集落では、たばこを栽培する男性は1人だけであった。彼はTクラン出身の50代男性Wで、自クランの他の男性との激しい土地争いの結果、1年半ほど前にYクランの土地に避難してきた。彼の妻は、YクランのPサブクランの女性であり、WはYクランの姻族にあたる。彼は、妻の父親から家屋や畑の土地を与えられていた。

Wはたばこの栽培方法をIクランに属す母方イトコから教わったという。彼によれば、たばこを栽培すること自体は容易だが、強く重い味わいのするたばこを育てるには、いくつもの工夫が必要だという。そのおおまかな手順は次の通りである。まず①苗床をつくるために、川沿いなどの肥沃な土地を選び、そこで木の枝など燃やし、炉の灰や豚の糞をまいて肥料とする。そこに家屋内部の煙で乾燥させたたばこの種を撒く。次に、②日当たりの良い土地を耕して、長方形の盛り土（およそ横14m×縦0.8m×高さ0.2mほど）の畑を複数つくる。③苗床から、たばこの苗を畑に移す。苗は直射日光に当たりすぎると良くないので、バナナの幹で日傘をつくって覆う（写真4）。④たばこの葉が黄色く変色しないように、適宜、雑草を取る。⑤10枚ほどの葉がついた段階で、たばこの種が実る頂点部分を取り除く。この時点で、たばこを苗床から畑に移動させてから3週間ほどが経過しているという。⑥その約1ヶ月後に収穫する。⑦それからさらに1ヶ月ほど、家屋内部の壁にたばこの葉を吊るして、炉で頻繁に木の枝葉などを燃やして煙で燻しつけ、乾燥させると完成する（写真5）。



写真 4 たばこの苗にバナナの幹を被せる男性



写真 5 たばこの葉を家屋内部の壁に吊るして煙で燻す

W は、T クランの土地に居住していたときから、たばこを栽培しており、彼の葉たばこは強く重い味がすることで知られていた。彼が Y クラン、P サブクランの土地に避難してくる以前には、P サブクランでも 3 人の男性がたばこを植えていた。しかし W が移住してから、彼らのたばこは売れなくなり、彼らはたばこの栽培を止めてしまったという。

W のたばこは、彼の妻が市場や路上で販売している。ただし、P サブクリンの男性らによれば、W の家を訪問したときには、彼はいつも「次は買えよ」と言いながら、葉たばこを新聞紙で巻いて 1 人 1 本ずつ与えてくれるという⁶。

そのため、日ごろから葉たばこを貰っていた男性らは、W が 2014 年 12 月に家屋を建てた際に、自ら進んで木材を提供し、建築作業を手伝ったという。通常、家屋建築の共同労働は、労働交換の規則に基づいている。つまり、ある男性が家屋を建築する際には、それ以前に労働力を提供した者たちから、そのときの返礼として助力を得ることができる。それゆえ、W のように他村からの移住者は、それまで家屋建築の労働交換の輪に入っていないため、男性らの助力を得るのが比較的困難である。しかし、彼の場合、日常的に葉たばこを複数の男性に贈与していたことにより、多くの男性たちの労働力を動員することができた。通常、家屋は、木材をすべて揃えた状態から、実際に建て終わるのに 1 週間ほどの時間を要するが、彼の家屋はわずか 3 日間で完成したとされる（写真 6）。



写真 6 「たばこで建てた」とされる家屋

彼は M 村に居住する男性のなかでは特殊例ともいえるが、この事例は、いかに現在の村落生活においても、葉たばこの贈与が関係構築の重要な媒体であることを示している。

⁶ 葉たばこに限らず、販売可能な作物はすべて、市場や路上で売りに出されたときには、いかに近親であっても贈与を求めてはならない。対照的に、市場や路上に売りに出されていないときには、親族ならば贈与を求めてよいとされる。

4-3-2. 紙巻たばこにみる「都市／村落」の二分法

一方、現在、紙巻たばこも、植民地期から独立前後の時期ほど、高い価値を与えられてはいない。紙巻たばこは、依然として「大きな名（名声）を得ることを考えて」購入するものと言われるが、その背景となる社会状況は多少異なっている。

上述したように、筆者がインタビューした男性のうち、日常的に紙巻たばこを吸う男性は6人のみであった。そのうちの1人の男性は、普段、首都ポート・モレスビーで、親族の男性が経営する会計事務所で働いており、2014年12月～2015年1月のクリスマス休暇に帰村していた。筆者が彼に何故、葉たばこより紙巻たばこを好むかと尋ねたところ、彼は「私は首都で生活しているからだ」と答えた。彼も味に関しては紙巻たばこよりも、強く重い葉たばこのほうが良いとし、村落で暮らしていた2007年ごろまでは、主に葉たばこを吸っていたという。しかし、2008年から首都と村落を行き来するようになり、収入も得て、村落で生活する「田舎者（*kanagae*）」ではなくなったため、紙巻たばこのみを吸うようになったと語る。

ただし、彼が村落に約2ヶ月滞在するあいだ、常に紙巻たばこを購入するほどの現金を所持していたわけではない。事実、2015年1月28日時点までに、彼は複数の商店などで掛買いして紙巻たばこを入手しており、その額は計58キナ（2552円）であった。再び首都で稼げばすぐに返済できる額ではあるが、この時点で彼が十分な現金を所持していなかったことは確かである。

それでも彼が葉たばこを吸おうとしなかった背景には、都市と村落の対比がある。サカ谷の村落では日常的に葉たばこを吸う男性であっても、必ず紙巻たばこを吸う文脈がある。それは都市に出掛けるときである。なぜなら、街中で葉たばこを吸うと、周囲の人間に「現金をもたない田舎者（*kanagae*）」「どこの田舎から出てきた貧乏人（*kanagae*）だ」と嘲笑され馬鹿にされるからだという。そのため、たとえばエンガ州の州都ワバグを訪れる際には、喫煙者は紙巻たばこを購入することのできる現金として最低3キナ（132円）ほどは懐に入れておく。

サカ谷の人々にとって伝統的な葉たばこが「現金のない田舎者」の指標となり、それとの対比で、紙巻たばこを吸うことが、都市に適切な振る舞いとして認識される点は興味深い。葉たばこと紙巻たばこは、「田舎者」と都市生活者という、生活様式の差異に結びつけられているのである。ここでの都市生活者とは、正確には都市で定収入をもつ者を指し、エンガ語で「ナイ（*nai*）」と呼ばれる。ナイは、植民地期のパトロール・オフィサーやキリスト教宣教師ら「白人」を指す語でもある。人々にとって、都市とは植民地期に「白人」がもたらした「新しい慣習」を実践する場であり、それゆえ、その生活空間に適合した人間はかつての「白人」と同じように「ナイ」と呼ばれるのである。都市では誰もが「ナイ」として振る舞うべきであり、それゆえ、伝統

的な葉たばこは嘲笑の的となる。

こうした事情があるために、クリスマス休暇に帰村した都市生活者は、味のうえで優る葉たばこよりも、都市生活者であることを示す紙巻たばこのほうを好んで消費していたと解釈できる。それは植民地期から独立前後の時代ほど高い名声を得る営みではないものの、自らのライフスタイルが他の村人よりも秀でていることを誇示する行為となっている。そこでは、個人的な嗜好を越えた意味づけが、2種類のたばこをめぐる展開している。

逆に、日常的には紙巻たばこを吸う者であっても、葉たばこのほうを選好する場所がある。これも上記と同様に、都市でのことだが、ニューギニア高地最大の都市ハーゲンの中心街である。1990年代前半までは、人々はハーゲンでも、紙巻たばこを口にしていたとされる。だが、1990年代後半から2000年代にかけて、ピジン英語で「ラスカル (*raskal*)」と呼ばれる強盗がはびこるようになり、ハーゲンはパプアニューギニアのなかで最も治安の悪い都市と言われるようになった。そして男性たちは口を揃えて、紙巻たばこを吸う男性は、比較的多額の現金をもっているとみなされるため、強盗の標的となりやすいと言う。そこで、人々は強盗を避けるべく、「現金をもたない田舎者」の指標となる葉たばこをあえて吸うのである。

このように、葉たばこと紙巻たばこの対比は、現金価値の違いだけでなく、人々の「伝統／近代」、「村落／都市」の二分法や、さらには植民地期から現在までの歴史認識を映し出している。これら2種類のたばこの選好は、単なる個人的な嗜好の問題としてではなく、植民地統治から国家独立というマクロな事象の影響下で変容するエンガ社会の動態との関連で理解される必要がある。

4-4. 考察

以上、本研究では、ニューギニア高地エンガ州サカ谷における喫煙慣行の持続と変化について、村落の社会関係との関連から論じてきた。エンガ州において、伝統的な葉たばこは、個人の消費や快楽を目的とするよりも、むしろクラン内外の社会関係を構築し、リーダーになる男性が名声を獲得するための重要なツールとして機能してきた。たばこは明らかに、先行研究で指摘されたような、取るに足りない財どころか、男性がクラン内の成員たちとの凝集性を高め、クラン間の政治的活動で名誉を得てリーダーになるために不可欠の財であった。

しかし、植民地統治から独立を経た、長期の社会変容のなかで、クラン内外の相互行為の内実と、そこで扱われるたばこの価値は常に変化しており、喫煙慣行もその社会的な役割を大きく変えてきた。工場製の紙巻たばこは、地域の歴史や、その歴史のなかで醸成された伝統＝我々／近代＝「白人」という人々の慣習とアイデンティティを取り巻く二分法、村落／都市という生活空間の認識に埋め込まれており、個人のミ

クロな消費実践というよりも、よりマクロな歴史的・空間的な広がりの中かで文化的・社会的意味づけを与えられている。

ただし、エンガ州サカ谷の人々にとって、工場製の紙巻たばこが近代的な都市生活を代表する嗜好品となる過程で、伝統的な葉たばこはその社会的な意義を単純に喪失したわけではない。植民地期から現在に至る喫煙慣行の変化は、そうした単線的な軌跡を辿るものでは決してなかった。村落では、むしろ工場製の紙巻たばこには無い、葉たばこの物質的特徴（強く重い味わい、長さ）と低価格であることを活かして社会関係が構築されていた。それによって、かつての男性小屋を中心とした慣習が消失するなか、その代わりに、葉たばこの日常的な共有や贈与が、クランの男性たちの関係を維持する社会的機能を果たしている。そこには徹底して、たばこという嗜好品を他者との関係へと開いていく態度がみられる。

本研究では触れることができなかったが、近年、エンガ州サカ谷のキリスト教独立宗派の信徒たちが、村落で禁煙を推奨している。興味深いのは、彼らが禁煙すべき理由を、健康といった個人的な問題ではなく、「昔、たばこを原因とするトラブルが多かった」という社会関係の問題に求めている点である。これは必ずしも、現在の喫煙慣行に合致するものではないが、彼らにとっての嗜好品がどこまでも社会関係に内属するものであることを示唆している。今後、禁煙を推奨するキリスト教徒と喫煙者たちが、さらなる社会変容の中かでいかなる関係を切り結んでいくのか、エンガ州サカ谷の文化的・社会的な論理から明らかにすることをこれからの課題としたい。

5. 引用文献

深川宏樹、「サブスタンスと交換による親族関係の構築—ニューギニア高地における葬儀時の母方親族への贈与の事例から」、『文化人類学研究』、2011、12 巻、90～112 頁。

———「ニューギニア高地における白人性の獲得—脱植民地期におけるキリスト教の実践」、前川啓治編、『カルチュラル・インターフェースの人類学——「読み換え」から「書き換え」の実践へ』、新曜社、2012a、30～46 頁。

———「村落裁判の形式化と戦略的利用—ニューギニア高地エンガ州における権威の希求」、『くにたち人類学研究』、2012b、7 巻、49～65 頁。

畑中幸子、「調停者は誰か—ニューギニア高地における文化変容の研究」、『民族学研究』、1975、40 巻 1 号、16～34 頁。

紙村徹、「対称性から相補性へ：パプア・ニューギニア高地、サカ・エンガ族におけるクラン間相互の対立競合の変容」、『天理大学年報』、1988、39 巻、345～370 頁。

———「ニューギニア高地の儀礼的贈与交換」、須藤健一・秋道智彌・崎山理編、『オセアニア② 伝統に生きる』、東京大学出版会、1993、111～125 頁。

- 熊谷圭知、「パプアニューギニア—地域的多様性から地域格差へ」、熊谷圭知・片山一
道編、『オセアニア』、朝倉書店、2010、247～264頁。
- Dinnen, Sinclair, *Law and Order in a Weak State: Crime and politics in Papua New
Guinea*, Center for Pacific Islands Studies, School of Hawaiian, Asian, and
Pacific Studies, University of Hawai'i Press, Honolulu 2001.
- Feil, Daryl, *Ways of Exchange: The Enga Tee of Papua New Guinea*, University of
Queensland Press, St. Lucia, Australia, 1984.
- Finney, Ben, *Big-Men and Business: Entrepreneurship and Economic Growth in
the New Guinea Highlands*, University Press of Hawaii, Honolulu, 1973.
- Gordon, Robert and Mervyn Meggitt, *Law and Order in the New Guinea Highlands:
Encounters with Enga*, University Press of New England, Hanover and London,
1985.
- Meggitt, Mervyn, "The Valleys of the Upper Wage and Lai Rivers," *Oceania*, 1956,
vol. 27, no. 2, pp.90-135.
- *The Lineage System of the Mae-Enga of New Guinea*, Barnes and Noble,
New York, 1965.
- "From Tribesmen to Peasants: The Case of the Mae Enga of New Guinea,"
In Hiatt, L. R. and C. Jayawardena (eds.), *Anthropology in Oceania*, Angus
and Robertson, Sydney, 1971, pp.191-209.
- "Pigs are Our Hearts!" The Te Exchange Cycle among the Mae Enga of
New Guinea," *Oceania*, 1974, vol. 44, pp.165-203.
- *Blood is Their Argument: Warfare among the Mae Enga Tribesman of the
New Guinea Highlands*, Mayfield Publishing, Palo Alto, California, 1977.
- Papua New Guinea National Statistical Office, National Censes, Enga Provincial
Report, National Statistical Office, 2000a.
- National Censes, Census Unit Register, Enga Province, National
Statistical Office, 2000b.
- West, Paige, *From Modern to Imagined Primitive: The Social World of Coffee from
Papua New Guinea*, Duke University Press, Durham and London, 2012.

6. 英文アブストラクト

An Anthropological Study of Smoking and Social Change in Enga Province, New Guinea Highlands

Hiroki FUKAGAWA⁷

This paper examines the social meaning of smoking practices and its change in the Enga Province, New Guinea Highlands. The method of study is the field work in a village on January, 2015. Tobacco was traditionally important tool to construct social relationships inside/ outside clans. In addition, gift of tobacco to exchange partners of the ritualized gift exchange called *tee* was the way to get the fame for the men to be leaders.

But smoking practices has dramatically change its role in the social transformation during colonial period and after the independence of Papua New Guinea. Factory-made cigarette was gradually getting popular. Because factory-made cigarette was brought to villages by Australian colonial rulers and missionaries, it was regard as a part of “whitemen’s custom”. Cigarette became the prestigious goods in the context of colonization.

Smoking practices are embedded in their social environment and historical consciousness in Enga Province. Its meaning is constantly changing according to dynamic social transformation.

⁷ Kyoto University